



学年最終単元をどう扱うか

山梨学院短期大学講師 松野 洋人

1 はじめに

いよいよ今年度も残すところわずかになってきました。授業は年度当初の予定どおりに進んでいるでしょうか。今回は、学年の最終単元について考えてみたいと思います。

最終単元は、各学年とも三領域の学習をすべて包含した総合的な国語学習単元として編成されています。即ち、一年間の国語学習の集大成として位置付けられた単元と見ることができるとは思います。

さらに、いわゆる「調べ学習」を位置付けているという点、大きな学習の流れが「調べる」↓「まとめる」↓「発表する」という構成になっている点も、各学年に共通した性格です。

2 具体的展開（第一学年の単元を例に）

第一学年では、『生活と言葉』身の回りのさまざまな言葉に

地域性や時代性を踏まえた、教科書所載以外の観点から課題例を示してあげることでも考えられてよいでしょう。

いずれにしても、この段階の学習では、生徒一人一人の学習が成立するか否かを見極めながら、教師は積極的に指導助言を行うことが重要です。

次のステップは、「研究計画を立て、調べる」です。教科書には「研究計画書」作成のための観点が四項目示されていますが、授業時数をも踏まえ、調査の方法と作業のタイムテーブルを詳細に決めることが重要になります。

研究課題によっては、放課後・休日等を利用した校外での調査活動も予想されます。その際の注意点、具体的には安全に關することや対人マナーに關すること等もしっかり指導し確認させておく必要があります。

また、情報源としてインターネットを利用することも予想されますが、インターネットは情報源として利便性が高い反面、情報の質という点では玉石混濁ですので、評価が定まらない不安定な情報も多く含まれています。従って、インターネット利用生徒に対しては常に目配りし、個別指導に努める必要があります。

図書館の資料を利用する生徒が圧倒的に多くなると思いますが、一人一人の生徒の研究課題に対応した資料が図書館にどれだけあるのか、司書や司書教諭等の協力も得て事前に確認しておくのも教師の大事な仕事です。

次の「研究結果をまとめる」のステップでは、情報の取捨選択と発表を見通した結果のまとめ方に配慮が必要です。とりわけ後者については、分かりやすく伝えるために、必要に応じてグラフ・図表で表したり、配布資料、ビデオ、コンピュータ等を活用したりして、デジタル化を図る工夫が大事です。

「調べる」→「まとめる」→「発表する」という活動目録（教材名）が示されています。

さらに、学習のステップが次のように設定されています。

- ① 研究の課題を見つける。
- ② 研究計画を立て、調べる。
- ③ 研究結果をまとめる。
- ④ 研究発表会を開く。

第一ステップは、「研究の課題を見つける」ですが、実はここで課題設定が、この学習全体の成否を分けることになるのです。例えば、「研究を始めたいけれど、関係する情報を入力するための資料が図書館等身近にほとんどなかった。」「研究結果を発表したのだが、取り上げた内容に問題があったらしく、あまり興味を示してもらえなかった。」というような反省が、この種の学習ではしばしば聞かれるのですが、これらは課題設定に問題があるのです。

教科書では、十二の課題を例示していますので、まずそれらを参考にさせるということが考えられます。また、状況に応じて、

最後の「研究発表会を開く」のステップでは、発表会運営の役割分担、グループ研究の場合の発表役割分担等を決めておくことは当然のことですが、より重要なのは聞き手への指導です。各発表を聞いて何を学べたのか、しっかりと確認させ記録にとどめさせる必要があります。「発表聴取シート」のような記録用紙を用意し、発表の要点や、発表を聞いて新たに知った事柄等を記入させ、それをもとに意見や感想の交換をさせると効果的でしょう。

筆者が過去に実践した事例を二つ紹介しましょう。

一つは、「正しい日本語表現を考えよう」という学習で、身の回りから「誤表現」を採取させ、それを整理し考察させ発表させるといふものです。はじめに、音声言語・文字言語の両面から、誤用頻度の高い日本語表現を学ばせ、そこから得た知識を物差しとして身の回りから誤表現を採取させたのですが、他教科の教師も授業中の言葉遣いや板書の表記に神経を使うようになるという、予期せぬ副産物まで生まれました。

もう一つは、「方言地図を作ろう」という学習で、県内で複数の表現がされている言葉を選ばせ、あらかじめ決めておいた地域でそれがどのように表現されているかを調査させ、それを県地図に落としし考察させ発表させるといふものです。休日等を活用し、録音機を持って土地の古老の声を拾ってくる者、図書館や市町村役場等で、各『市町村誌』の記述からアプローチする者等、興味のある学習には、生徒たちは主体的・積極的に取り組むということを感じさせられた実践でした。

生徒たちは、課題にアプローチする道筋が見通せれば「調べる」という学習には強い興味と意欲を示します。一年間の学習成果が実を結ぶような実践を期待したいと思います。